
M o o n & S a n

沙麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Moon&Sun

【著者名】

N2641F

【作者名】

沙麻

【あらすじ】

幼い頃から、あることがキッカケで人と関わることが苦手になってしまった深月^{みつき}。そんな日常を送っていたある日、陽^{よう}という男の子に出会い…？！

プロローグ

鳥が空を慕つよつて……

魚が海を恋つよつて……

私は誰かを恋するのだろうか

…それは

『運命』

といひうやの類のものなのだろうか……

…私には分からぬ

第一章【R e m e m b r a n c e - 憶・】

ジヤー———…

力チャカチャ——…

「ねえねえママ！—」

5才くらいの少女が、皿洗いをしていたらしく母親のスカートの裾をクイックと引っ張った。

「なあに？深月」

流れる水を止め母親はエプロンで手を拭き、ふわっと優しい微笑みを浮かべ少女一深月の田線に合わせるよつこじやがんだ。

深月は照れたような表情をしながら

「あのねみいねママとパパとみいの絵を描いたんだよ！—！」

…と、にこりと笑い持っていた絵を

「じゃーんっ！—…」「じゅうじゅう」という効果音と共に表に出した。

一枚の画用紙には…男と女を描いてありその二人の間には少し小さな女の子の姿があった。父、母そして深月を表しているのだひつ。びこが心温まる絵だった。

「パパとママとみいなんだよ」

「まあ上手だわ」

エへへと笑う深月の頭を撫でながら「か嬉しいような笑みを浮かべ言つた。

「パパにも見せてくれないかい？」

リビングでソファーに座つて本を読んでいた父が、かけていた眼鏡を人差し指でくいっと押し上げながら深月と母に近寄ってきた。

「うん……こよ」

深月が持つていた絵を覗き込むと…

「おおーこれは上手すぎる！深月は将来有名な画家になれるぞ？！」

わははと豪快な笑い声を上げながら囁く。

「本当？！みい頑張るね」

ガツツポーズをしながら言う深月に母と父は一瞬顔を見合させたが「頑張つて」とニコッとして深月の頭をくしゃつと撫でる。

ジリリリコリ――――――――――――――――――

いきなり鳴り響いた一つの騒音で暖かく…微笑ましい場景が、幻を見せた霧かのようにサラーと消え去つた。

「……音の正体は田覚ましだつた。

シンプルに飾られた部屋に、朝の田覚めを告げる為に高らかに鳴り響く。

「……嫌な夢見た…」

いつからに流れているのだろう…目尻から流れる涙を拭い、まだ鳴り続いている音を少し乱暴に叩き止め一人の少女がムクリとベッドから起き上がる。

少女まみやみつき一真富深月は少し青ざめた顔つきをしていた。あんなに微笑ましい夢を見たというのに…

深月がベッドの上で暫くの間片手で顔を覆つて俯いていると…

――コンコン…

遠慮氣味にドアをノックする音が聞こえた。

その相手は分かつてゐるのだろう

「……何? ちい姉さん」

何故か深月はうそぞりとしたような表情を浮かべ応えた。

その声を合図にか…『ちい姉さん』と呼ばれた人物はバンッとドアが壊れんばかりの勢いで開け放ち部屋に入つて…と言つよつは深月

自身に突進してきた。

「どう…」

「おっしゃよーみこちやんー！」

そう言いながら深円に抱き付いた。

「おこ…離せ」

さあーっと抱き締められている深円は次第に怒りを、いや思い切り拒否の空気を醸し出し始めていた。ちい姉さん一闇富茅はその空気を読み取ったのか、ぱっと体を離した。

「やだなあーそんなに怒らないでよ。スキンシップじゃない」

あくまでも反省の色はビリにも見られず、口元に笑つてくる。

「スキンシップだあ…? うちはちい姉さんのせいで毎朝首を痛めてんだけど?」

「まあまあ…落ち着け…」

「落ち着いてられるか」のバカ…反省じゆよ…つたへ

「深円…」

「さこ…」

いきなり自分の名前を呼ばれた深田は思わず返事をしてしまった。

「あんた…男の子だつけ?…!」

「は? 女だけど…?」

「その言葉遣いは何?…!」

「何つて?何?」

「～～～!」のひねくれ少女め

「ふつ…ひねくれ少女ってなに? 頭おかしくなつちやつた?」

明らかに見下したような発言に茅は徐々にムキになつてくる。まあ…それがおもしろくてワザとしているのだが…

「もひいこわよ…!」飯抜きだからねー?」

「別にいいし

何を言つても応えない深田に対しても茅は若干悔しそうな…しんみりした表情を浮かべた。

「嘘だよー一緒に食べよう? 1人じゅ わすがに寂しいよ~…

そんな茅は駄々つ子のよつに腕をぐいぐいと引っ張る。

「ー…何歳だよあんたは

「18歳だよ？」

「はいはい……どうでもいいよほひ早く準備してやつ。」

適当にあじりこ促した。

「了解しました深月隊長……！」

「うわと一つ笑いビシッと敬礼をして部屋を後にした。

「何のノリだよ……ていうかあんた25歳だろーが。せば読みやがって」

茅がいなくなつた部屋でボソッと呟き、深月は学校に行く準備を始めた。

第一章【R e m e m b r a n c e - 憶 -】2

制服に着替えると鏡の前でリボンなどを探し、机の上に置いてあった鞄を掴み取り部屋を後にしてた。

――――――
――――――
――――――
――――――
――――――

トントンと階段を下りていくとフワッとい香りが漂ってきた。

「あつみこちゃん早かつたね。」

深円の足音に気がついたのかキッキンにいた茅がこちらに視線を向けた。

「せうか?ふつづだる...今日の朝飯は何だ?」

「...深円?言葉」

深円のあまりの口の利き方に茅は眉間にしわを寄せた。

「はいはー。...朝、飯は何でしょーか?お姉さま、

「もー、今日は田舎焼きとウインナーですよー。あとパンと、」飯ど
つちがいい?」

「飯...じゃなくて、」飯で

キツと睨まれて言い直した。

「えー？普通パンじゃない？」

じゃあ聞くよ。心の中で悪態を突きつつ
「だらうね」と適当に『氣のない返事をした。

「ほら、座つて座つて……」

テーブルの上にコト…コトと並べられていく一人分の食事。

深月は一つの椅子に鞄を置きそのいすの隣に腰掛け、茅は深月の前に座った。

一人は黙々と食べ続けていた。会話一つしないものの重い空気という訳ではない。毎朝一人の間に流れる穏やかな空気だ。

「ねえ…みいちゃん」

…だが珍しく真面目な表情で茅が空気を割り話しかける。

「？」

口の中にパンを詰め込んでいる状態なので声が出せず、首を傾げてそれに応える。

「みいちゃんて友達いる？」

いきなりの質問で驚いたのかパチパチッと瞬きをしたが、それは一瞬のことだ…ぐんと口の中のパンを飲み込みすぐ元の表情に戻り

「…こらなこ」

と言つた。

『こる・いなー』の答えではなく深田は『こらなこ』と呼んでいた。

「みいちゃん…」

「心配すんなよ。別に普通に過(ひ)ごめん」

悲しげな表情を浮かべた茅に氣づかれて笑つて言つた。

「うそ…いやでもねー…」

ホッとした表情をしたかと思えばまた何かを思(おも)い出したかのよつて
また浮かない表情をする。

「え、何だよ?」

安心したり憂(ゆう)いたり…忙しい奴だなあめんどくせーと思いつつため
らいがちな語尾が気になつた。

「それ

「は?」

「みいちゃん…口悪いでしょ? 多分少なからず敵を作つてると思つ
んだけど」

そう…深田はめつたに笑わない無愛想で口調が男っぽいだけあって
少しでも語尾を上げたりすると機嫌が悪によつてみられることがあ

る。ほほ無自覚の毒舌だったりもする。

「あー……」

「くへつか思いつへ顛があるのだが……

「ほり、せっぽつねー。」

何故か得意気に囁つ茅。

「何だそれ……大丈夫だつて

「本当にー？」

「疑り深いな

「だつてなかなか本心囁つてくれないじやない。周りの人にも少し
ずつ自分をさらけ出さないとー。」

そのとき深田の眉がぴくりと動いた。これは何かを拒否する前に起
きる前触れを意味する深田のクセだ。

そんなクセを知っている茅はヤバい……地雷踏んだー……と焦り慌て
て謝る。

「あーー」めん[冗談だよ?]

「……」

「……」

長い沈黙が流れ始めた。…が

――――ペーンローン

客が来たことを告げる音が鳴った。

深月はバツと時計を見て

「…多分美桜だ」

そう言いながら立ち上がり隣に置いてあつた鞄を肩に掛けながら玄関に向かった。

「え？ 友達？」

茅は慌てて深月の後を追いつつ尋ねた。

「いや、あっちが絡んでくるだけ……」

よく分かんないと呟つよつな口調で呟いた。

「そりなんだ……でも学校一緒に行く時点で結構仲がいいってことじゃないの？」

「…………仲がいいって何？」

「え？」

「いや何でもない。行つてきます

深月の眩きに呆然としている茅にそう言つて家を後にした。

「え？…あ、うん行つてらっしゃいっ

慌てて深月の背に手を振りながらそつ投げかけた。

——パタン

「あの子…まだ…」

家に一人残された茅はぽつりと言葉をこぼした。

第一章【R e m e m b r a n c e - 記憶 -】3

家を出ると、ひそかに微笑んでいる少女一平瀬美桜ひらせみお一が立っていた。

「おはよう深川ちゃん」

そういうふた美桜を一瞥だけをくれて横を通り抜けた。

「ちょっと無視しないでよつ……」

「…………」

……

……

…… テクテク…… テクテク……

スタスタ…… スタスタ

ピタッ…… ピタッ

「何なんだよ…ついて来んじゃねーよ…ストーカーかテメエは」
クルツと回り後ろから深円とある程度距離を置いてついて来ていた
美桜に向き直る。

「みいちゃんのばかーっ」

ジトーと深円を見据えるときなり叫んだ。

「誰がみいちゃんだ…！」

「一緒に学校行こうねって約束したでしょ?…」

「話聞けよ…！…ていうか…そんな約束した覚えねーよ

変な嘘ホントすんな気持ち悪いなどと、眩きながら手を引き離した。

「相変わらず深円ちゃんは言葉遣い悪いねえ」

しみじみと美桜は呟いた。

「ひさいな……なに笑ってんだよ、何か可笑しいのか？」

鬱陶しそうに顔をしかめるが、美桜の表情を見て怪訝そうな表情に
変わった。

決していい言葉を浴びせられた訳ではないのに、美桜は笑っていた。

「深月ちゃんの怒った顔面白いんだもん……」

クスクスっと楽しそうに笑う。

「お前はガキかよ……」

「……」

そんな美桜を無視して足を進めた。

「あつ……深月ちゃん待ってよ」

置いて行かれていることに気付いた美桜は走って深月の後を追った。

第一章【escape -逃げ-】（前書き）

私の小説を読んで下さっている方に　更新の方遅くなつてしまひ申し訳ございませんでした。

第一章【e s c a p e - 逃げ -】

——キー・ノ・パー・ンカー・ノ・ロー・ン……

予鈴が鳴った。いつもなら余裕に席に座つているはずなのに、途中美桜に足止めをくらつてしまつたため、ギリギリになつてしまつた。（ちくしょう…あいつのせいで…）いつか相変わらず川瀬は鬱陶しいんだよ。あいつが絡んできたのは…いつからだつけな？覚えてねーし。

だいたいきなりなんなんだ？中学も一緒にたが今ほどあんなにしつこくつづついてくることはなかつた……はずだ。

高校に上がつてすぐくらいか？）

遅刻寸前なのにもかわらず自問自答を頭の中で繰り返しながらトボトボ歩いていると、いつの間にか教室の前に着いていた。

（やめやめ。考えるのも怠くなつてきた）

教室前は予鈴が鳴ったというのに内から人の話し声や笑い声が聞こえる。この雰囲気の中に割つてはいるのは少し気が引けたが、そうも言つてられない。

——ガラガラ

深月が教室の戸を引くと案の定教室内が一瞬しんとした。担任が来たのかと反応したのだろう。だがそれは一瞬のことでも騒がしくなる。

(そんなに反応するのなら予鈴前には席に着いてるよ。でも、あんなに一斉に黙るなんてある意味団結してんじゃね?)

などと下らなことを心の中で呟き、カタンと椅子を鳴らし席に着いた。

何もする事がないのか深用は机に突っ伏した。朝は当たり前の「」と茅が突っ込んでくるために、体力を消費してしまつ……

本当あの人は困る…今度突っ込んでくるときナイフでも用意しどうか

などと恐ろしいことを考えていると、

「おーい席に着けー」と気の入らない声で、席に着くことを促しながら頭がややバー「ード禿つぽくなっている担任が入ってきた。

「おせーよ、ハゲ」

失礼極まりないことを呟いた。

するとその呟きが本人に聞こえたのだろうか、チラリと深用の方を見た。

(…え。聞こえてたか?…んなわけないよな、あそこから一番遠いし)

深用の席は窓際の一番後ろときていて一番教卓から遠い。もし聞こえたとしたのなら相当な地獄耳だ。

いや、ハゲという言葉には過敏になつてゐるのだろう。

「可哀相に…」

そう心の中で呟いた。

はずなのだが、声にていていたのだろうか…

「ブフツ」

「クスツ」

二つの噴き出した声が前と隣から聞こえた。

「は？」

「「あつはははーっ」」

「え?ー!」

先程噴き出した2人が盛大に笑い始めた。

突然のことには深月は目を丸くしたまま固まつた。クラス全体も何があつたのかとこちらに注目している。

「みいちゃんおつかしいーあははっ」

そう笑いを堪えながらも、結局は笑っている前の席の、美桜。

「ククツーあつははは」

何かつぼにはまつたのか、まだ笑い続いている隣の席の人。

「「アンタ最高っ」」

2人が声を揃えて深月を指差しながら言った。

「何が可笑しい？…そして人を指差すな」

怪訝そうに顔を歪ませながら2人の指をググッと思い切り反対側に押し曲げてやつた。

「「い」でででで」」

見事にハモリながら痛がる2人を前に、思い切り不機嫌を露わにした表情で一人をにらむ。

「「怒らないで（よー）」」

涙目の2人が上目遣いで深月を見る。

「可愛くない」

ぱつたりと言い切り2人の指を解放する。

「お前ら一ツうるさいぞ！…」

「はーい」

「へーい」

「……」

それぞれ返事（？…）をしながら前を向いた。

第一章【escape・逃げ】2

今月の予定を伝えるだけで担任は教室から出て行った。

(あー やつのはやばかったな… 声に出てたなんて)

深月は軽くうなだれる。机に突っ伏していると

「え…… ねえ……」

誰かに呼び掛けられていることに気付いた深月は、ちらりと顔を浮かして自分を呼んでいる人物を見た。

「ねえ！…みいちゃん」

…美桜だ。

心底うんざりしたような、鬱陶しいと言ひよつた表情をした。

「……」

そんな顔だけを見せて再び突っ伏す。

みいちゃんって何だよ、などと言おうとしたがどうせ美桜のペースに引きずられるためやめた方が賢明だと思いシカトすることに決めた。

「うわっ…ひどっ…なにその反応… つておーいシカトしないでよ

ー

「うぬせいかと思いつつも反応一つ返さない。

「みいちゃんーみい・ちや・んー」

イラッ

いい加減腹が立つてきた。意味が分かんない一ツクネームを連呼すんなよ。

「みつこーっちゃん」

とことう美桜はわざわざ深月の耳元で騒ぎ始めた。手でメガホンを作り、みいちゃんと騒ぎ立てる。

「うぬせいかーー！」

バシッ

「ぶつー！」

美桜の顔面を掌で押しのける。

「ていうか”みいちゃん”て何なわけ？」

少し赤くなつた鼻をさすりながら美桜は平然と深月を指差しながら言った。

「え？みいちゃんはみいちゃんでしょ？」

「……指差すなつづつてんだろ？がよーー！」

ググッと人差し指を思い切りあり得ない方向に反らす。

「い、つだつーい、」

体裁を食らわせられた美桜は半泣き面で深月を睨む。全く怖くないが。

「友達にこんな事したらダメでしょー!？」

もう…眩眩とする。

「誰が誰の友達だって言つんだよーー!」

「みいちゃんはあたしの友達つーー!」

さっきまで泣きそうに顔を歪ませていたが、がらりと変わりっこつと満面の笑みで答える。

その答えと笑顔を受けた瞬間…

(…お前が死ねばよかつたのにーー)

(お前なんか…いらない)

大人の男が、小さな少女を蹴りつけ、殴りつけながら罵倒の言葉を浴びせている場面が…深月の頭を過ぎった。

「ひ…ーー」

その時深月は激しい吐き気に襲われ、ガタガタと机や椅子に当たりながらその場にしゃがみこんだ。

第一章【escape - 逃げ -】2(後書き)

誤字などがありましたらお知らせください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2641f/>

Moon & San

2011年1月8日22時04分発行